

西照

西照寺寺報「さいしょう」 第47号

2024年10月3日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久2丁目4-40

郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺

西照寺WEB <http://nisitera.eek.jp>

報恩講 勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月六日(水) 午後二時(逮夜)↵

七日(木) 午前九時半(満日中)↵

布教使 林 史樹 師 高岡市伏木要願寺住職

※今年度お齋(御膳)はありません
また、六日晚のお初夜はありません

西谷山 西照寺



苦悩の現実を見つめる

釈尊の出家の動機は、「老・病・死」に思い至ったからとされています。人は皆、年をとり、病気になる、死んで行かねばなりません。楽しく幸せに暮らしたいと思っても、そのことを苦悩や不安としか受け取れません。何故、苦しむのか。どうやったら解放されるのか。そして、苦しむことにどんな意味があるのか。それが釈尊の課題でありました。

菩提樹下の瞑想の中から釈尊が気づいたのは、一切の存在は「縁起の道理」によって成り立っているということでした。あらゆる存在は、無量無数の数限りない因(原因)と縁(条件)とに依って、相互に関係しあって生起(結果)、「因縁生起」している。いろいろなもの、因縁(条件)が仮に結合して「因縁仮和合」、仮にこのような存在(かたち)になっている。永遠で固定不変な存在などどこにもない。「諸行無常」といういい方もします。条件が変われば、すぐ変化し滅していく。今日、何時死んでも、一つもおかしくない私です。

このような中にあっても、これは私の命で、確かにいつまで

も存在するのではないかと思う私があります。他者などから区別して意識される自分を「自我」といい、分別する心から起こるとされています。また、人間の知恵のことを仏教では「分別智」といいます。

健康と病気があれば健康の方を、若者と老人がいれば若者の方をなどと、あらゆることを分別して、これが良いとか、あれが悪いとか自分にとって都合の良い方に執着する。その「思い」(執着)が満たされたことに幸楽を感じ、そうでないと不幸や苦悩を感じる。健康も病気も形の変化に過ぎず、どちらも百点のはずですが、どうしてもそのようには受け取れません。

自分の思い通りに成らないから苦悩を感じるのですが、釈尊は、それは、縁起している事実そのものからのほたらき、事実に戻れという呼びかけだと気づいてくださいました。

分別を克服できれば、ありのままに、自然に生きられると言われるのです。

しかし、現実には、私は存在し、私の命を「生きている」という、分別を本質とする「自我」があります。

事実はどうか。私の命だと言いながら、自分で造ったものは

何一つ有りません。生まれようと思つたのでもないのに、生まれてしまったら今の環境であつた。自分の力(甲斐性)で生きていけるように思つていますが、他の動植物の命を取つてこないと生きられない。空気や水など大自然のめぐみ、心臓一つ、血液なども自分で動かしているわけではありません。私を生かそうとする不思議なはたらきがある。さらに、人は一人では生きられません。私の心あり方も含めて、多くの方々と相依相関している。

事實は、限らない、はたらきやつながりのなかで今を「生かされている」私であつたということが真実です。私がいると思つている、その私を構成(条件)しているものを一つずつ剥ぎ取つていくと、何も残らない0、空である。「無我」であると仏教は教えています。現実には「自我」があると思つているが、事実(真実)は「無我」ということです。仏教では「即」という言い方をしますが、紙の表裏のように一体ということ、ですから、「自我即無我」ということなのでしょう。

「生死即涅槃」という言い方もします。涅槃や仏様の浄土と聞くと、私とかけ離れた別世界、理想郷のように思う人もいます。

事實は、涅槃のなかにありながら、それに気づかず逆らつた形でしか生きられないのが私ということなのでしょう。

仏様の教えに、そのことを気づかさされた親鸞様は、『一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり』(歎異抄)と述べられています。すべての生きとし生けるものは、親兄弟のように近い関係のなかにいた。事實は、無限なる網目のように皆が繋がつていたということ、そのように気づくことを、仏教では「智慧」(無分別智)を開くといひます。その智慧から、すべての困つている人たちのために動行する「慈悲」が生じてくる。

そこに人間として生まれてきた私の意味と真の欲びがあると、仏教は説いています。

ですが、どれだけ仏法を聞いても、死を忘却しながら自分の「思い」を満たすことに引きずり回されている現実の私がいま。



言葉と成つた阿弥陀様

(裏面へ続く)

(中面からの続き)

阿弥陀様は、すべてのものを必ず救うという本願(誓願)を『南無阿弥陀仏』という言葉と成って、私に届けてくださっています。

阿弥陀とは、原語の「アミターバ」(量りしれない光明をもつもの、無量光)と「アミターユス」(量りしれない寿命をもつもの、無量寿)が合わさって、原語の発音を残すために、そのように発音できる漢字を当てはめる「音写」という訳し方がされた言葉です。

仏とは、覚者(目覚めたるもの)という。阿弥陀仏とは、無量光(空間的に無限)、無量寿(時間的に無限)ということに目覚めたるものという意味です。かたちのない無限なる時空から、阿弥陀という姿を現し、言葉となって「目覚めよ」と届けてくださっている。

南無とは、原語の「ナモ」の音写です。「帰命」という意味になります。普通、帰命というと、私が仏に向かって祈願すること、また、こちらの仏に向かっての帰依の感情の表現として使われています。

しかし、親鸞様は『帰命は本願招喚の勅命なり』(親鸞聖人「教行信証」行巻)といわれます。いのちの真実から、自我の闇に閉ざされているあなたに気づきなさいという、阿弥陀様からの呼びかけ(勅命)とだけかかれています。私から仏への方向ではなくて、仏から私への方向ということです。

『南無阿弥陀仏』と言葉となってくださった仏様の名前を唱え、私に向けた阿弥陀様の救いのはたらきを感じ取っていく。

そこに、自我の闇に閉ざされている私の姿に気づかされ、そうだったと目覚めさせられていく、そのことを浄土真宗では「信心」といいます。『如来よりたまはりたる信心』(歎異抄)ともいいます。同じ信心という言葉でも、私が対象に向かって起こす信心のことではありません。

言葉となった阿弥陀様のはたらきのなかに、私の命の根源にはたらく願いを感じるとき、自然と社会性を持った意欲へと繋がっていきます。

また、老病死の現実は変わりませんが、客観的に自分の姿を、知覚されることを通してそのことを苦悩としか受け取れない視点からの解放へと繋がっていきます。 合掌